

## 8. 45度線分析

### マクロ経済で習うこと

市場	生産物市場	貨幣市場	労働市場
供給	生産要素 資本、労働	マネーサプライ	労働者 (失業率)
需要	消費・投資	貨幣需要	企業
価格	物価 (消費者物価 卸売物価)	利子率 (国債利回り)	賃金 (雇用者所得)

45度線分析は、GDPの三面等価の原則を使って、政策効果を導き出すもの。利子の上昇による投資の減少など、金融面の効果は考慮しておらず、IS分析の一種となる。

#### 三面等価の原則と、その表現法

	( )	( )	( )
具体的には？	自動車やパソコンなどの生産	消費や投資	企業収益や賃金
45度線分析では	( )	( )	( )
記号は？	$Y_s$	$Y_d$	$Y_I$ (Yのみで表す場合も多い)

・ 均衡国民所得と完全雇用国民所得 (45 度分析)

均衡国民所得とは、( ) と ( ) が等しくなるときの国民所得である。  
 45 度分析の枠組みでは、需要が発生すると、それと同じだけの供給がなされると考える。  
 ほしいものができれば、誰かが生産してくれるという仮定である。このため、均衡所得とは、現在の需要 (消費、投資) で達成される国民所得を表す。総供給曲線は、( ) と同額の供給という意味で、45 度線になっている (このため 45 度分析と呼ばれる)。

需要がそれと同額の供給を発生させるというのはかなり強い仮定であり、この仮定は A S - A S 分析でははずされる。

$Y^*$  は均衡国民所得,  $Y_F$  は完全雇用国民所得

$Y_F$  は 500 兆円

投資を 100 兆円

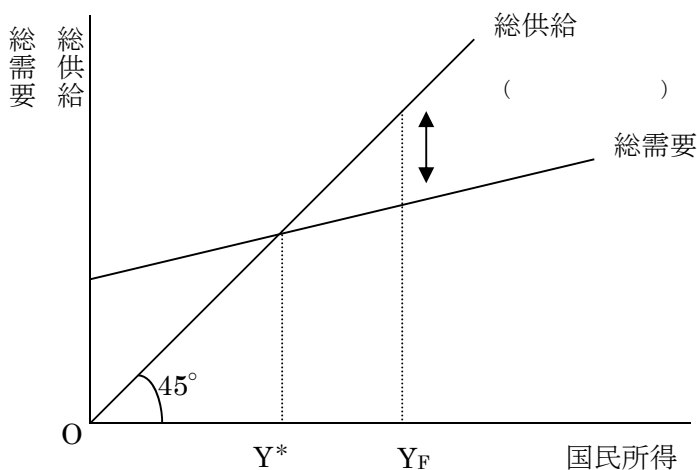
消費関数を  $C=0.5Y+50$  (単位: 兆円)

総需要曲線は、 $Y_d=C+I$  から作る。

$Y_d=0.5Y+50+100=0.5Y+150$

$Y_s=Y_d$  (総供給は総需要と等しいだけ生産される)

三面等価の原則にしたがえば、 $Y_s=Y$  である。



### 均衡国民所得と完全雇用国民所得

均衡国民所得は、消費関数と投資額が決まれば決まる。

しかし、均衡した所得で全員の雇用がまかなえるかどうかは分からない。  
なぜなら、消費関数や投資額には雇用量の情報は含まれていない。消費や投資によって自動的に均衡国民所得が決まる。

一方、

( ) 国民所得＝労働者が全員雇用される国民所得の水準。

こちらは、全員が雇用される国民所得を表す。

$Y_F$ で供給>需要ならデフレギャップがあり、需要<供給ならインフレギャップがあるという。

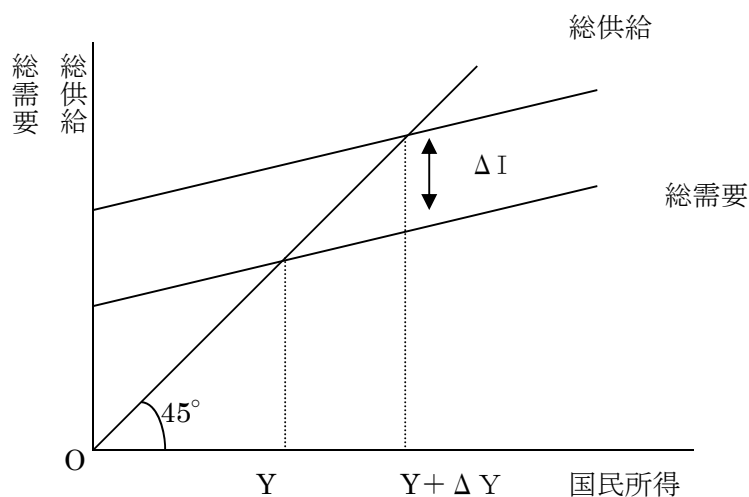
矢印の部分をデフレギャップと呼ぶ。

## 45度分析による乗数効果

Y を均衡国民所得

投資を I

消費関数を  $C=a+cY$  (単位：兆円)



投資が  $\Delta I$  だけ増えたとき、所得はどれだけ増えるか、を考える。

均衡点にあるとき、三面等価の原則より、

$$Y \text{ (総供給)} = C + I = a + cY + I \text{ (総需要)} \quad \dots \textcircled{1}$$

が成り立つ。

投資が  $\Delta I$ 、所得が  $\Delta Y$  増えても総供給 = 総需要の式は成り立つため、

$$Y + \Delta Y \text{ (総供給)} = C + I = a + c(Y + \Delta Y) + I + \Delta I \text{ (総需要)} \quad \dots \textcircled{2}$$

② - ①より、

$$\Delta Y = c \Delta Y + \Delta I$$

$$\Delta Y = \frac{1}{1-c} \Delta I \quad \text{(重要)}$$

- (1)  $0 < c < 1$  なので、 $\Delta I$  よりも、 $\Delta Y$  の方が大きくなる。(乗数効果の重要な特徴)
- (2) 乗数は消費性向が大きいほど大きい。